

へ丁度丈助がおしのをいたぶりに来る。おしのは焦立つ小三郎を無理に次の間へ押入れて、丈助を家の中へ入れる。丈助は何處までも權太もどきにおしのを籠絡しにかゝる。おしのは何處まで丈助をやさしく取扱つて、道明寺の覺壽のやうに出し抜けに丈助を殺す。丈助は手負ひになつて小三郎とおみゑの前にすべてを懺悔する。——原作では丈助が來たと知ると、おしのは小三郎とおみゑに、若旦那は眼が悪し、お嬢様は繊弱いから、とても眞面のことにしては丈助に敵はない。だから暫らく次の間二人ともかくれてゐる必要があるといふやうなことをいつて、二人を次の間へ追ひやることになつてゐる。芝居では三幕目には小三郎は眼を煩つてゐるけれど、この幕ではもう全快してゐる。しかしこゝはやつぱりまだ小三郎が眼を煩つ

てゐる方が、そこに人情晰らしい陰鬱な味があつて好いと思はれる。

□おしのと丈助との對話はそつくり原作通りで、なんの加減、——舞臺の上の二人の人物の臺詞とするについての加減がそこになんにも施してなかつた。しかし私は直ちにそれを咎めることはしない。ただ東藏のおしのも、菊五郎の丈助も、チヨボの三味線が絶えずその一言／＼の合ひ間／＼に響いてゐる舞臺だといふことを考へてゐなかつた。二人ともある用意を忘れてゐた。ことに東藏のおしのは考への持ち方や臺詞のイキの出しかたには座ろに沈鬱な圓右の高座を思はせるものがあつた。——たゞそこにはおしのと丈助の對話が綿々として盡きるところなく二人の間に續いた。さうして脚燈の

青い色が一杯に暗い舞臺を染めてゐた。

□吉右衛門の大野惣兵衛、榮三郎の仙太、勘彌の小三郎、芙蓉のおみゑ、——どれも私には取立て、推稱することの出来るものが見當らなかつた。吉右衛門の惣兵衛は原作の惣兵衛よりずっと役がよくなつてゐる。向島白鬚前に於て、大詰の堀切別荘に於て。菊五郎は丈助より新之丞の方が私には好かつた。備はつてゐる貫目があつた。さうしてなほ其處に、情のある濃やかなものがその貫目のなにかにかくれてゐた。(三、一一)

安政奇聞佃夜嵐

愚圖く段取つてゐると遅くなるから、構はず序幕から一幕く書いて行つてみる。

深川成田開帳の場。

此處のところ別になんにもいふことはない。上州屋の悴の半次郎や、手先の三好野龜次郎や、巾着切の清次郎や、甲子屋の遣手のおくまや、その他後の幕へ出る藝者や幫幫が顔をならべて、一と通り

青木と神谷の二人が佃島の寄場に苦役してゐることと、半次郎の親父の五兵衛が深川の假宅通ひに浮身を賣して、甲子樓の羽衣に夢中になつてゐるといふことの後段の筋を賣るだけの話だ。當り前の序幕だ。だが、たゞ筋を賣るだけのことにしては、三津五郎のやる巾着切や、おもちゃの落語の成田小僧のやうな丁稚が賑やかに働かしてあつた。

佃島寄場飯焚所の場。

新十郎、飯助、吉兵衛、壽之助、鶴若なんかの寄場人足が七八人、みんな水玉のお仕着を着て、大きな石の竈の前にいろ／＼動いてゐるのがまづ面白かつた。物相の箱を片付けながらいろ／＼の仕事辛い事から青木や神谷の噂をする。——その工合がいかにも自然な味

があつて面白かつた。東藏の平五郎が出てくる。人足がみんな下手へはいると、竈の陰から吉右衛門の神谷玄藏が鐵の刺杖を持つて出てくる。後の仕事は俺が一人でやるからと神谷がいふので、平五郎は湯にはいりに行く。後で神谷がいま人足たちがしてゐた噂を考へて、噂の通り自分と青木とは生涯再び娑婆へ出られないとすると少し考へ直さなければならぬといふやうな獨白をする。揚幕のなかで元締の見廻りの聲が聞える。神谷は火の餘燼を消しにまた竈の陰へはいる。花道から元締や役人が出てくる。下手に菊五郎の青木をはじめ囚人が大勢並んで見廻りに對する挨拶をする。役人がそのまゝ上手へはいると、囚人もみんな下手へはいる。竈の陰から神谷が出て来て青木を呼びとめる。神谷は青木に今聞いた自分たちの噂の話

をする。生涯世の中へ出られないで、このまゝ寄場の土にならねばならないといふのは何う考へても口惜しい。神谷は青木に、自分はとにかく、お前は親の敵を討たなければならぬ身體だといふ。青木が親の敵の事は一日も忘れたことがないが肝心の敵の手がかりがなんにもないので、何うにも仕方がなくつてゐたといふ。すると神谷が、その敵ならば自分が知つてゐる。お前の親父を殺したのは御家人仲間、悪黨と云はれた山田三十郎だと云ふ。青木は敵の手がかりがつかないので、なんだか世の中へ出たくなる。丁度風が變つて、其處へ深川の假宅の絃歌の聲が遠く聞えてくる。青木はいよいよ世の中へ出たくなる。青木がいひ出して、二人は其處で鳥を脱ける相談をする。

筋書でみると、神谷の方が何うも青木より役者が一枚上になつてゐなければならぬやうになつてゐる。話はちがふが、いつてみれば「四千兩」の藤十郎と富藏との工合のやうに。全體鳥を脱けようと考へるのは神谷で、一人では何か都合が悪いので青木を誘惑にかゝる。まだその上に自分なんかとちがつてお前は親の敵を討たなければならぬ身體だ、その望みを遂げないでこゝで死んではいよく不孝の上塗になるといふやうなことをいつて氣を持たせる。假宅ではあんなに賑やかに騒いでゐる。娑婆へ出れば遊ぶことも出来る。それにお前は敵を討つことが出来るといふやうなことをいつて氣を持たせる。しかし吉右衛門にはその心もちが全く見えてゐなかつた。誘惑するといふ心もちが全く見えてゐなかつた。青木と同じ

水準の上に立つて、親身に吉右衛門は青木に相談をかけてゐるやうに見えた。「雨気で東風に變つたせるか、遠く聞える假宅の、面白さうなあの騒ぎ。」といふ臺詞も吉右衛門はべつに爲めにするところがあつた。それではなくつて、何か自分で自分の心もちを深く考へてゐるやうに見えた。全く考へ違ひをしたのか何うか、初日のことだから私は深く考へない。吉右衛門といふ人はいつも全く初日には駄目な人だ。いつも全く眞實のことの解らない人だ。二日三日と日を経つてしたが、暗闇がだん／＼明るくなる。いつてみれば、其處に吉右衛門といふ人の仕事の結果に、沈着があり、深いところのある所。以ないのであるまいか。風が變つて聞える假宅の騒ぎの鳴物はぢきにやんで仕舞ふ。私はあの騒ぎの鳴物をもつと思ひたいと思つた。

少くも幕ぎれにもう一度使ひたいと思つた。

以上が序まく。

深川假宅甲子屋の場。

上州屋の五兵衛が大勢末社を集めて騒いでゐる。羽衣が無理に其處へ連れられてくる。遣手のおくまが先立で、末社がみんな羽衣の間夫の幸七のことを散々讒訴する。新造の賤機と一しよに廊下を通りかゝつて幸七がそれを聞く。座敷のなかに飛込んで幸七は五兵衛と苦しい意氣張になり掛先の金の封を切る。「封切」だ。これを忠兵衛で行かれたら何うにも仕様がなだらうが、菊五郎は、疳癩で、ある突きつめた一筋の心もちで、なんの躊躇もなく財布の中へ手を

入れた。二枚目は何處までも二枚目だ。江戸の、木場の人間の勝氣をその心もちの上に持つてゐた。其處に愚圖くした悔恨がなかつた。東藏の五兵衛は筋書に書いてあるやうな老人には見えなかつた。入右衛門のやうな工合だつた。芙蓉の羽衣は幸七とイキがよく合つた。菊三郎の遣手は憎味はきいてゐたが調子がすこし時代だつた。萬野のやうな工合だつた。樂之助と伊三郎との幫間が黒船の話や大地震の話をする。おくまが幸七から二十兩返して貰ふのを見て、近々小判の相場が上るといふのに羨ましいといふやうなことをいふ。背景になつてゐる暗い「時代」のことが考へられた。

佃島寄場構外の場。

上手の柵矢來を乗り越えて石垣の上へ青木が下りる。着替への着

物を首に括しつけてゐる。お仕着を脱いで腹掛一つになる。石を付けてお仕着を水の中へ抛り込む。後から神谷がまた柵矢來を乗り越える。神谷は着替へを頭の上に結びつけてゐる。青木は杭に足を踏んがけて静かに暗い水の上へ下りる。二人とも無言の儘。

深川山本町の場。

神谷と青木のために上州屋の半次郎が無盡の金を二百兩掠奪される。筋書にはこの道具半廻しになると書いてあるが、廻らないで其處へ新十郎と翫助の駕屋——閻魔堂の勘次と蛤町の平助とが出てくる。勘次の方が二人へ今掠奪した金の符牒分が貰ひたいと強請りかける。平助の方は側から勘次を止める。立廻りになる。愚圖くしてゐるうちに平助は神谷に川の中へ突き落される。勘次も青木の

ために切石で殴られる。其處まではまあいゝ。それから神谷と青木と二人で、勘次の手と足を持つて、勘次の死骸を川の中へ抛り込む。書生芝居の寫實だ。

序まくに神谷が、お前の親の敵は山田三十郎だと青木にいふ。すると青木が何うしてお前はそれを知つてると神谷に押し返して聞く。神谷が平助といふ男に聞いて俺は知つてるといゝ、加減なことをいふ、その平助といふ男がぼんやり此處へ出て來たのだ。其處になんの前觸もなく出てきたのだから、音なしに見てゐた分には、平助の生涯が神谷の生涯にそんな深い關係を持つてゐるといふやうなことは全く考へられない。

此處でも吉右衛門はなんだかもそくしてゐて、青木よりも一枚

上の役者に見えなかつた。そのくせ菊五郎は神谷より何處か一枚下の人間のやうに見えた。

深川油堀一の橋の場。

本花道から幸七、假花道から半次郎が出てくる。述懐のカケ合をやる。兩方死ぬ覺悟である。幸七が舞臺へ來ると、半次郎の方が先へ身を投げかけてゐる。幸七は驚いて半次郎を抱きとめる。話を聞いた結果、幸七は自分の使ひ残りの二百圓の金を無理に半次郎に提供する。幸七はそれで思ひ置くことがなくなつて身を投げる。——半次郎といふ役は割りに詰らない役だ。

本所御船藏飯屋の場。

不動様へ朝まゐりに行く講中の仕出し。講中の名を書いた萬燈の

提灯を手にて手に持つてほかの講中の來るのを待ち合はせてゐる。下手からやつぱり萬燈を押し立て、講中が出てくる。一しよになつて賑やかな花道へはいる。吉兵衛の飯屋の亭主が出てくる。見世の戸をあけにかゝる。其處に神谷と青木がぐつすり寝込んでゐる。徳利や皿小鉢が四邊に散亂つてゐる、——暗く疲れたやうな夜明の心もちがなんともいへず面白かつた。

二人は眼をさます。青木が濟まないが熱い奴を一本つけて呉れといふ。亭主は四つ目にうまい蕎麥があるから買つてくるといつて出て行く。二人は寢起に一杯飲みながらこれから先の身の振方や敵をさがす事なんかをいろ／＼相談する。序まくの三津五郎の巾着切が二人の相談をそばの茶店の葦簀つ張りのなかで聴く。面白いところ

でお目にかゝりますといつて、其處へ出てくる。青木はさりげない顔でこれから高飛をするのに都合が悪いから、何か堅氣にみえるやうな着物を工面して来てくれと頼む。此處はとにかく人通りが多いから、半込のどん／＼へ行つて待つてゐて呉れといふので、清次は承知してはいる。後で彼奴に逢つちやあ油断がならないからい、加減なことをいつて撒いてしまつた。しかし愚圖／＼してはゐられなから早速何うにかしやうと二人がいつてるところへ亭主が蕎麥を買つて歸つてくる。だまされたと思つて上つてごらんなさいまし、なか／＼よく打つてごさいますからといふ。よく打つたとはい、幸先だと青木が喜ぶ。亭主がまたお銚子が好くつきましたと持つてくる。「なに調子がい」とまた青木が喜ぶ。いつもの技巧で、青木が

ふとなんとか口走るのを亭主が聞き咎める。青木がすぐに「なあに蕎麥がよ」といひ紛らす、其處に五分のスキもなくつて好い心もちだつた。割りに氣のつかないことだけれど、其處には割合に繊細な心もちが織り込まれてゐる。

以上二幕目。

根岸甲子屋別荘の場。

舞臺は穩やかな鼠壁のいろに支配されてゐる。白い障子、竹格子のはいつた窓。窓のそとの田圃。――屏風をとり退けると、其處に紫の蒲團の上に、匹田の胴拔の下着を着た羽衣が草双紙を讀んでゐる。なんともいへず情があつた。

近江屋半四郎とくまが上州屋へ行くやうにいろ／＼に羽衣を説く。羽衣はさかない。あくまは折檻して承知させると立上ると、其處へ甲子屋の亭主の文四郎が出て来て、その折檻は俺がすると羽衣を土藏のなかへ連れて行く。折檻する音が聞える。近半や賤機や寮番の夫婦が心配して騒ぐ。其處にもうすこし何うにか纏つた心もちが出すことが出来れば面白いのだけれど、徒らにざわ／＼するばかりでちつとも面白くなかつた。全體段取も悪いけれど、幕があいてから暫くのしづかな心もちをすつかり滅茶々にされた。榮三郎の近半も吉兵衛と玉之助の寮番夫婦も好かつた。幕あきに玉之助が會式の花を手を持つてゐるのを面白いと思つた。

同土藏内羽衣責の場。

此處の道具はなんとかもうすこし工夫がありさうなものだつた。少くももうすこし陰鬱な舞臺が見たかつた。羽衣は生體なく泣き倒れてゐる。文四郎は張扇を叩いて音をさせて、折檻すると見せかけてゐる。お前の身の爲めだから此處はとにかく一度承知をして上州屋へ行つた方がいゝとしづかに意見をすする。三日でも四日でも辛抱すれば、あとは俺が何うにでもしてやるからといふ。ときくさあ返事をしねえのかと聲を高くして邪慳に張扇を叩く。三津五郎は初日のせぬかも知れないがこの變り目がしつくり巧く行かなかつた。「慈悲」のあるやうには見えだが、その情の厚い、意地の強いところが見えなかつた。羽衣は文四郎の情に絆されてとにかく承知する。文四郎は喜ぶ。さういふことならお前から得心したといふ手紙を上

州屋へ書けといつて出て行く。賤機が硯を持つてくる。羽衣は死ぬ覺悟をする。得心の手紙を書く代りに書置を書く。獨吟とチヨボとをふんだんにつかつてしばらくは私の親愛な芙蓉の一人舞臺になる。禿がそこへ手紙はまだ書けないかと催促にくる。禿を相手にまた愁嘆になる。禿を出すのは好いと思ふけれど、これが玉三郎では何うにもならない。

鎌倉河岸上州屋の場。

二幕目のことにすると、東藏の五兵衛は鬚が細くなつてたいへん老けた。二幕目ではいまは堅氣の商人だけれど以前をいへば羽織破落戸だと幸七に酷く啖呵を切つた。その面影は全くこゝでは求められなかつた。からもう他愛がなくなつてゐる。すつかり三枚目にな

つてゐる。おくまや幫間が羽衣が得心したといふ報知を齎らして來る。先刻羽衣が土藏のなかで書いた手紙を見せる。讀んでみると自害して死ぬといふ書置だから驚く。五兵衛はつくづく眼が覺める。

面白くもなんともない幕だ。

以上三幕目。

三幕目と四幕目の間に中幕の「宅兵衛上使」がはいる。

甲州蓮華寺庫裏の場。

青木は敵の山田三十郎を尋ねて甲州へ來たが、人目を忍ぶために蓮華寺の所化になつて住込んでゐる。しかしもう千箇寺廻りなんか

になつて江戸から捕方が入り込んで來てゐる。久しく江戸へ出てゐた惣吉といふ村の者が墓參に來て、門番といろく江戸の話をする。その話のなかから、青木はゆくりなく自分の親の敵は山田三十郎でなくつて、今まで仕事の相棒だつた神谷だといふことを知る。丁度神谷も甲州へ來てゐると聞いて、すぐに神谷を探しに出かける。——重要な場の割りに格別面白くもなかつた。たゞこの四幕目のあいたとき、私は久しぶりで「中幕のあと」のある疲れた明るい心もちになることが出來たことが嬉しかつた。

同一里塚出會より捕物の場。

神谷は甲州へ來てやつぱり人目を忍ぶため百姓家へ奉公してゐる。嵐で倒れた松の木に腰をかけて煙草をのんでゐるところをこれ

も江戸から来た巾着切の清次に見付かる。清次に別れると其處へ青木が來かゝつて出會になる。青木は神谷を責める。神谷は何處までもシラを切る。青木が詰れば詰るほど神谷は剛情を張る。立廻りになる。其處へ序幕に一寸出た榮三郎の三好野金次郎が出て来て、二人の周圍は大勢の手先に圍まれる。青木は敵を討つことが出来ないで、神谷は青木に討たれないで二人は捕縛される。

以上四幕目。

五幕目の「高崎驛上州屋の場」「同奥座敷再會の場」大詰の「小傳馬町牢屋敷の場」とは出幕にならなかつた。

この芝居の大體の評がしてみたいと思ふけれど、大詰まで見ないのだからうっかりした事はいへない。もう一度すつかり見直した上

のことにする。しかし初日にみたところではなんだか印象のうすい芝居で、(無論これはしつかりした中心がないからだ)敵同士が何うのかうのといふ筋をきいてたときの方が餘程面白かつた。要するに序幕の寄場と二幕目の飯屋とが面白かつたのみ。(三、一〇)

「荒木又右衛門」と「切られお富」

一番目の「荒木又右衛門」の二幕目から見た。

どう考へても、あんまりかゝり合はない方が伶俐らしいから、六幕目の「鳴海夜寒の里待伏」まで評なし。

六幕目の返し、「岡崎尾花屋。」

義理と義理とに責められて、どうにも死ぬよりほかに思案の盡きた二川の蝶次郎が、二世かけていひ交はした小夜衣と、清元をつかつて、かなしい別れをする一段である。

この清元の曲が、「其小唄夢廊」。

いはなければ解らないが、一體この芝居は、碧瑠璃園の小説を脚色したとあつて、筋書にも、「頃は寛永三年の秋——」といふやうなことが精々書いてある。登場人物がすべて齧の小さな鬘をかぶつて、自棄に紋の大きな着附を着て出て来る。——寛永だか元祿だか知らないが、髮容萬端、典雅でさうして濃艶華麗な、三越の廣告によく以前描いてあつたやうな姿の小夜衣が、小紫権八の淨瑠璃をきいて

種々の物思ひにふけるといふのだから世話がない。

幕があくとすぐ、蝶次郎の出て来ない前に、尾花屋の女房が今日来た奉公人だといつて、小夜衣のところへ女の子を一人連れて来る。

——これが何年前かに行方の知れなくなつた、小夜衣と蝶次郎との間に出来た娘のあいとで、あとですぐこれが、蝶次郎と親子の名告をするしないといふやうな綾になる。——段取の上に、そこに工夫もなければ苦勞もない。

つぎは「藤川驛筋違橋袂の改心」。

死ぬ覺悟の蝶次郎のあとから、死なば諸共と小夜衣が追つかけて来る。やうやくのことで蝶次郎に追ひついて、一人で死なうといふその無情を掻口説いて、トパーしよに、とにかく辻堂の中に入る。

そこへまた、二人のあとを追つかけて來るのが、小夜衣の兄の傳次である。辻堂の前で、小夜衣が落した二人の起請だか誓紙だかを拾ふことに依つて、辻堂の中に二人のゐることを知る。莫迦くしく頭腦がいゝといはなければならぬ。辻堂の前に腰を下して、中にゐる蝶次郎へ聞かせに、傳次が種々な文句を並べてゐると、丁度そこへ、吉田の四郎兵衛がまた來かゝる。傳次に遇つて、辻堂の中に二人のゐることを聞いて、さらにまた四郎兵衛が、種々蝶次郎のために、憂世の義理といふことを説いて聞かせる。いつまで又五郎のやうな悪黨に義理立をしてゐたところで何にもならないから、思ひ直して、又右衛門の方の味方になつて、數馬や又右衛門の方の味方になつて、數馬や又右衛門のために働いた方が天理にかなつた仕方

だといふやうなことを種々に説いて聞かせる。

この、傳次がいゝ加減一人で喋舌つたあとへ、すぐにまた四郎兵衛を出して、同じやうなことをクドクとまた喋舌らせるのは、隨分智恵のない話である、働きのない話である。

ト、蝶次郎が辻堂の中で腹を切る。傳次と四郎兵衛が驚いて、辻堂の中から蝶次郎を引張りだすと、蝶次郎が、手拭へ、九州相良と又五郎の落ちつくさを血潮でもつて書いて見せる。

飛んだ「沼津」である。

この幕があいて、蝶次郎や小夜衣が出て來るときには、雨が降つてゐて、舞臺は黑白も分かぬ闇夜である。それが四郎兵衛の出で來る時分になると、いつの間にか雨が霽れてゐて、蝶次郎が腹を切る

時分には、いつの間にか、舞臺が闇夜でなくなつてゐる。

別に月の出たやうな様子もなかつたが、ことに依つたら蝶次郎が九州相良と手拭に書いて見せたときには、もう夜が明けてゐたのかも知れない。

流石にそこへ行くと、「沼津」を書いた『伊賀越道中双六』の作者は頭腦が好かつた。平作が重兵衛の道中差を抜いてあの腹へ突立てる前後が、親子同胞の顔を明らかに見交すことの出来ない暗闇であることが、どの位あの芝居の哀れを深くしてゐるか分らない。

以上二幕の役々のうち、出来は、九藏の蝶次郎と、糸三郎の小夜衣とであつた。九藏の蝶次郎は、若い、氣の弱い男の、義理だの人情だのといふやうなことに苛責される苦悶を明かに見せてゐた。糸

三郎の小夜衣は、一體米藏の役を替つてゐるのだつたが、その、暗い、陰鬱なところが、いかにも一筋に男を慕つてゐる弱い女になつてゐた。

九藏と糸三郎とは、一寸またとない、似合の好い夫婦役者だといふことが思はれた。斷つて置くけれど、これは皮肉でもなんでもない。私は以前から、九藏といふ人の薄倅な生涯に同情を持つてゐる。三十郎の傳次と、九團次の四郎兵衛とについては何もいふことがない。たゞ四郎兵衛が、又右衛門に申譯がないからと坊主になつて来るのは、一時半兵衛を何うかした形があるといはれても爲方がないだらう。

大詰の敵討は、前半は見なかつたから知らないが、後半はすつか

り『日本晴伊賀報讐』の敵討である。

たゞいつもは柘榴武助と池添孫八の二人が、數馬が首尾よく又五郎を爲留めるまで無事であるのだが、この芝居では、一人池添孫八が、途中で櫻井甚八に深傷を負はされて本懐のところへは全く顔を見せない。なんでもないやうなことだけれど、本懐のところへ敵を討つ方の顔をみんな揃へないといふことは、あまりに「敵討」の芝居を見る見物の心理を考へない爲方である。

訥子の又右衛門の兩刀の立廻りの、問題にならないほど不味かつたことを特筆する。

二番目の『切られお富』。

全體この本郷座の評は、この二番目を中心にしなければならなかつたのだが、詰らない道樂をしてゐたものだから、わがお富さんのことを細かに書いてゐることが出来なくなつた。

莫迦なことをした。

見染から何からすつかり略して、後半「薩埵峠一つ家の場」からである。紀の國屋のおとみのほかには、そこにはなんにも樂しみが無いのなら、結局この方が爲合である。何にしても、訥子の源左衛門、三十郎の安、九藏の與三郎では、あまりに周圍が落ちすぎる。

ところで「薩埵峠一つ家の場」も大分荒つぽく手を入れてあつた。行燈の灯影で、思はず二人が顔を見合はして、互に與三郎であり、おとみであることを知るまで。——さうして、その後の、別れてか

らの種々の話をした揚句が、二百兩の金の入譯になるまで。——この間が莫迦に簡略であつた。

正本には、鹿菜の火の燃え上るので二人が顔を見合はせることになつてゐる。この方が行燈の灯影より効果があるやうに思はれるけれど、行燈をつかふのには、そこに何か理由があるにちがひない。何か季節の關係かも知れない。何かそのうち機會があつたら誰かに聞いて見たいと思つてゐる。

與三郎と話をしてゐる間、おとみが絶えず手拭で顔を隠すやうにしてゐた工合がなんとなく眼に残つてゐる。

それに、與三郎の後姿を見送つて立つた姿を、その獨白とともに私は忘れることが出来なう。

おとみが與三郎と話をしてゐる間に、下手から安藏が出て来て生垣のかけに身を潜める。二人の話の始終を聞いて、身悶して口惜しがるのだが、生憎三十郎の安は、身體がすつかり生垣のかけにかくれてゐた爲め、東からは、安がどんなことをしてゐたか全く分らなかつた。

だが、生垣のかけから出て来たところで見ると、あの安藏の、暗い險しい心もちを、三十郎は全然掴んでゐないやうに見えた。

二幕目の「御勒町赤間屋店先の場」同、内證部屋の場。

安藏に聲をかけて、駕の垂れを上げて出て来るおとみのその姿。

——安や源左衛門がもうすこし何うになかつた役者だつたらと、ここでまたつくづく思はなければならなかつた。

源之助だけが徒に浮上つて見えることが私には悲しかった。

九團次の船津幸十郎は、旅商人で赤間屋の客になるあたりは無事だつたが、道具替に、一寸船津幸十郎になるところで、見事馬脚をあらはした。

内證の強請は、特に手法の十六夜清心の白連宅の強請を思はせるものがあつた。

「切られ〜といはれても——」の強請の臺詞も、去年の二月、宮戸座で聞いたときは、比較にならないほど快く生き〜としてゐた。

花道の引込。——安が引込んでから、フト安にたばかられたことに氣のつく呼吸。——すぐに氣をかへて、急いで安のあとを追つか

けて這入る氣組。——田圃の太夫の生命はまだ〜これからである。

久しく見ないから、秋には一つ「鬼神のお松」か「女定九郎」のやうなものを何か見せて呉れ給へ。

氣を入れてゐたとは思ふが、三十郎の安は、なんだか性根がグラついてゐて、どうにも問題にならなかつた。話がこれは外作のことだが、私はこの安が、土臺いまはもうおとみに倦きてゐるといふことになつてゐるのか面白い。

訥子の源左衛門と糸三郎の源左衛門の女房とは評なし。

幕間が長いといはれて、畜生塚の殺しは見ないで歸つた。

右二日目見物。(四、七)

断片

□自由劇場「夜の宿」へは二十九日の日と、三十一日の日と二日ま
りしました。今度は三日間で、——勿論三日間とも一杯のやうな模
様でした。

□役割は大分さきをと、しの時とはちがつてをりました。前とおん
なじのは、吉松のコスチレフと、秀調のワシリサ、米三のアンナ、
又五郎の帽子屋、市十郎の役者、源十郎の靴屋、それに左升のルカ
だけで、あとは松蔦のやつたナタシヤを香川玉枝がやり、宗之助が

やつたナスチヤを松蔦がやり、其ほか喜三造のやつた巡査は團右衛
門、左團次のやつたペルは猿之助、猿之助のやつた錠前屋は荒次
郎、荒次郎のやつた男爵は壽美藏、壽美藏のやつたサチンは左團次、
左喜之助のやつた、物賣女は島次郎と、おのく役が振りかはつて
をりました。人足と韃靼人はご存じの諸口と稻富とがやりました。
これは前には國之助と島次郎でした。——貴方がそつちへお出でに
なつてから、おなじみの吉松は蕙八、島次郎は米左衛門と改名しま
した。それから今度はでませんでしたけれど、喜三造は中村鶴藏に
なつて、今は宮戸座に出てをります。いづれ何か機会があつたら詳
しく紹介しやうと思つてをりますが、非常に調子のいゝ役者になり
ました。——これは餘計な事ですけど、序手ですから申添へて置

みます。

□「西洋の芝居を單に「紹介する」といふ時代は過ぎました。單に「やつて見る」「試みて見る」といふ時代は過ぎました。現今東京にある幾多の新劇團は頻々として西洋の名作を舞臺の上に紹介してをります。西洋の芝居を單に「紹介する」だけが自由劇場の使命なら、同劇場の存在の餘地はもう無くなつて居ると云つても好いだらうと存じます。私共はそろ／＼「技藝」の時代に這入らなければなりません。今まで單なる「紹介」として皆さんの前に動かした戯曲を、これからは「技藝」として——演劇としての獨立的價値を有する技藝として、皆さんの前に展開しなければならぬ事になりました。私共らが今までやつた事は無謀でした、粗葬でした、野蠻でした、これから

は一つの戯曲を一節から一節と深く長く細かく研究して、段々に自分の氣に入るやうな物を仕上げて行かなければなりません。(後略)——これは今度の公演の前に會員のところへ廻つた通知書の一節です、私はこれを読んで、胸のつかへがすこし下がつたやうに思ひました。——しかしその「幾多の新劇團」のうちには、かう開き直つていはれても、恐らく何んの事も考へないやうな、無謀な、粗葬な、野蠻な向きのある事を私は悲しみます。

□人情で、つひこの前のときを考へますが、こんだの芝居は、この前のときの事にすると、たいへん一體の「調子」の詠歎的でないことが考へられました。多い中には、「この前の方が面白かつた」といふやうな向きがあつたやうですが、さういふ向きは要するにその詠

歎的でなかつたことに、或る心もちを裏切られて、それでお氣に召さなかつたものと思ひます。——しかし今までは、所謂頻々として西洋の名作を紹介する新劇團の演出に、必ず或る Pathetic な、——或る月並な、下直な sentimentalism が纏綿してゐた事が割合に怪しまれずにゐました。——一體新しい芝居の批評には、いゝ加減なものの方が多い世の中なのですけれど。

□舞臺の設備や人物の扮装も、前とは大分ちがつてをりました。舞臺の設備はモスコオの美術座で最近にこの芝居をやつたとき使つたものに據つたのださうですが、流石にト書と寫真から割りだした工夫では、一寸近づくことができないだらうと思はれるやうな、深い、手堅い「考へ」——「眞實」がそこに現はれてをりました。以前の

ときの舞臺の設備にも、當時は酷く感心したやうに覺えてゐますが、こんだの事にすると、随分それは曖昧な、淺墓なところのあるものであつたやうな氣がします。「地下室」の場で、下手のアンナの寢てる寢床のあたりから、役者の寢る暖爐のあたり、臺所の戸口のあたりの工合。——それから、上手のサモワルの置いてあるあたりから亭主やワシリサが出入する眞つ暗な奥の方のあたりに、いかにも細かな整つた考へ方のしてゐるのが感じられました。「路次」の場でも、この前とちがつて、上手寄りのところに、防火壁と宿の壁との間にあるものゝほかにもう一つ路次口がついてゐました。そこは扉の様なもので塞がれてゐて、その毀れた間から、サチンと役者とが無理から匍ふやうにして這入つてくるところが、たいへん面白うござい

ました。人物の扮装も、おそらくはお手本に據つたものなんでせうが、ペベルでも、男爵でも、帽子屋でも、全く前とは工合がちがつてをりました。ペベルは前のやうに眞つ黒な髪を後ろへ梳いた眼の怖い、意氣な、すごい奴ではなくつて、短い赤毛の鬘をかぶつて、眞つ赤なシャツを着た、氣のいい若造でした。男爵は前のやうに首へ何か巻きつけて、薄汚ないマドロスみたやうな男ではなくつて、のいゝ口髭を持つた、顔の赤い、何處か由緒ありげな恰好をしてをりました。——要するにすべての事の行き方が、自由に、放たれたやうな行きかたでした。

□こんだの芝居で、一番の出来だと思つたのは左團次のサチンで、一番困つたのは蕙八のコスチレフでした。サチンの爲に、私はこん

だは四幕目がたいへん深く頭腦へ残りました。ナスチャや、男爵や、錠前屋が、みんな氣が揃つてゐて、周囲のよかつた譯もあるでせうが、あの「大工」の話するあたり、あの暗いランプの灯影の下に、或る陰鬱な、空漠な心もちがいかに四邊に迫つてくるやうに感じられました。見渡したところ、サチンの役をこれだけに爲こなすことのできる役者はほかに一寸ない様に思ひます。私はボルクマンより、チュランより、こんだのサチンの役一役で、高島屋が立派な近代劇の役者だといふことが深く考へられるやうに思はれます。蕙八のコスチレフは、前るときからの持役で、前ときにはこんなに酷いものではなかつたやうに思ひます。「路次」のところで、窓から首を出して巡禮にいふ臺詞のごとき、いかにも息の切りかたが舊式で、

なんだか不思議に勝手がちがつてをりました。こんな筈はないと思つて、或る消息通にききましたら、何か家に心配事があつて、頭腦を大分悪くしてゐるのだといふ事がわかりました。——私はこんだの役一役の失策で、親愛なるこの人をこのまゝ葬つてしまひたくないと思ひます。

□秀調のワシリサは、たしかに前の不評をとり返すことができたと思ひます。少くとも、前るときとは氣の入れかたがちがつてゐたと思ひます。とにかく新派から離れることができてゐました。ナスチャをやつた香川玉枝の名前は、おそらく一度もあきになつたことがないだらうと思ひますが、この女優は技藝學校の四期生で、殆んど舞臺へでたことがないから世間でも名前を知つてゐるものはごく僅か

だらうと思ひます。私はこの七月、技藝學校の試演會で、和氣氏の譯したゼロオム、ケエ、ゼロオムの「バルバラ」といふ芝居で、なんとかいふ姉娘をやつたのをみて、なか／＼素性のいい女優だと思ひましたが、おそらくこんだ引張りだされる光榮を有したのもこんなところから認められてせう。たゞまだ教養が足りないだけに、とき／＼周囲の人たちと調子がとれないところがありました。割合に舞臺についてゐて、割合に感情のニュアンスを出すことができました。それに調子が優しくつて、聞いてると痛々しい氣がしました。この頃によく新聞に寫眞がでゐる、五厘の繪草紙みたやうなべた／＼した心持の悪い名前をつけた女優にくらべて、育ちがちがふだけ有望だと思ひます。——しかし「路次」の場の幕ぎれは、前

のときの松蔦を思ひださないことはできませんでした。松蔦のナス
チャは一と通りでした。——私は松蔦については、こゝ暫く何にも
考へまいと思つてます。

□市十郎の役者は、前にはあんまり評判がよくなかつたものでした。
しかし今度は大分行きかたをちがへて、アルコール中毒で身體が思
ふやうにならない工合なんか、いかにも氣を入れてやつてをりました。
た。これはこの市十郎といふ人が、このごろは舊の明治座の連中から
離れて一人宮戸座へはいつて、澤市だの岩藤だのをやつてゐます。
だが、とにかく眞面目に、しみぐゝした味をだしてゐたと思ひます。
二幕目の「新しい生活……初めつから……いゝなあ、そんな事が
出来るかしら、新しい生活……」と考へるところなんか、とにかく

く心もちがあつたと思ひます。さういへば源十郎の靴屋も、源之助
が明治座を離れて以來、このごろは蓬萊座へ出て、關三なんかと一
しよに芝居をしてゐますが、蓬萊座の方は代り役をたてる位にして、
こんだの芝居に自ら馳せ参じてきたのださうです。やつぱり非常に
氣を入れて演つてをりました。——これは外國にゐる貴方へ書きた
よりとして、特にかういふ話をお知らせいたします。

□左升のルカは、前には一番評判になつたものでしたが、ところが
今度は大分愚圖々々いふ向きがあります。しかし私の見たところ
では、前とはやつぱり大分行きかたをかへて、今度は穩かな、静か
な心もちの中に、前生涯の何かを思はせるやうな、冷たい、醒めた
やうな心もちが隠れてゐたやうに思ひました。まづ序幕で、ペベル

に「歌はよして呉れ」といはれて、「歌は嫌ひかな」とか、「わしのはうまくなかな」といふ調子にしてからが、前の様に、碎けた、氣のさすやうに和かい響がなかつたと思ひます。「路次」の場の物語にも、どこか暗く沈んだ調子があつたと思ひます。

□猿之助のペベルは、構はず江戸つ子で推し通つた解釋に、すこし考へのちがつたところがあるやうに思ひました。しかし前の高島屋のやうに人柄に深味が見えないので、いかにもルカの話に動かされる様子にみえました。序幕で「かうやつて暮らしてゐるのに——不意に氷にでも閉ぢられた様に厭な氣持になるんだ。たまらなく氣が沈んでくるんだ。」と苦悶するあたりで、私は喜熨斗君の生涯の苦悶をかながへました。さうして陰鬱に陥るところに、ペベルにして

は、何か足りないものがあつたやうに思はれました。

□又五郎の帽子屋は、私はまだこの前のとさの出来を覚えてゐるやうな氣がします。こんだも全く素で行つて、私には嬉しい氣のするものでした。しかし又五郎といふ人に同情を持つことのできない人には、あの聲の上つ調子のところや取つてつけたやうな笑ひ聲が不愉快に感じられたかも知れません。壽美藏の男爵は、前に云つた扮装の加減で、貴族の面影がしのばれました。調子のい、しかたを平生と全くかへてゐました。「路次」の場で、ナスチャの「悪縁」の話をしてゐる間、始終顔をふるはしてゐた様子が眼に残りました。

□米左衛門の物賣女は、肉と骨と油とで三十貫以上もあるといふ柄からして、前の左喜之助よりすぐれてをりました。顔の感じも何處

か外國の女らしいところがありました。團右衛門の巡查は、非常に真面目に——随分損だと思はれるほど真面目にやつてをりました。

□かうやつて一々書いてきましたら、なんだか通り一遍のお座なりをいつてる様な工合になつてきました。こんな一人々々の細々した事を書くつもりではなかつたのですが、つひ先を急いだものですか、こんな事になつてしまひました。これからまだ歌の事や、各幕の幕切の事や、大分書きたいことがたくさんありますが、何んだかすこしアガキがとれなくなつてきましたから、こゝらでいゝ加減氣をかへて、ほかの事に移ることにいたします。

□自由劇場が終つたあくる日、一日の日に田端で井上正夫の後援會主催の野外劇がありました。丁度前のばん帝劇の廊下で切符を買ひましたから行つてみました。芝居は日の暮れからで、四時までに白梅園へ集まることになつてゐたのですが、生憎とまた風の寒い日で、随分其待つてる間こたへました、前の觸れ込みでは泉さんの芝居をやるといふのでしたが、當日始まるまで何をやるのだから解りませんでした。始まつてみたらそれはいつぞや新小説にでゝゐた「紅玉」でした。

□舞臺は白梅園の裏の廣つ原の真ん中で、丁度見物席に宛られた藎の上に坐つたとき、西の方の明るく暮れ残つた空に四日ばかりの月

がかじやき初めてゐました。そこにはべつに燈火の設備がある譯でもありません。——やがて崖の下から、瀬戸日出夫や、木下二葉なるといふ新派の子役が三四人出てきて、それで芝居がはじまりました。

□ 繪師は井上、腰元はのしほ、伯爵は關根。——伯爵が出てきた時分には、四邊が眞つ暗になつてゐました。さうして芝居が濟む時分には、月が雲のなかに沈んでゐました。

□ 芝居が濟むとすぐ、井上が出てきて、その眞つ暗な中に立つて挨拶をしました。それは要するに「自分も何んかやりたいと思つてゐる。それでまづこんな事をやつてみた。——しかしそのうち更に何かやつてみるから。」といふやうな意味のことをいつたのにすぎないので

したけれど、私はその言葉のなかから、ふと井上の生涯を考へて、なんともいへず井上が氣の毒になりました。その後新時代劇協會が再興するといふやうな噂がありました。それはたゞ噂ばかりで、何んの事もなく、そのまゝ井上は春から秋にかけて、今年はずうつと旅にばかり出てゐました。この間久々で歸つてきて、明治座の伊井の芝居へ出たやうでしたが、伊井の芝居もすつかりこのごろは人氣がなくなつて、大分苦境に陥つてゐるやうな矢先です。それで井上は今のところ、一寸東京に歸るべき家がないやうな鹽梅になつてゐます。——勿論井上自身はどんな氣であるのだから解りませんが、周圍から見ると、いかにもそれが不仕合な身の上のやうに見えて仕様がございません。

□そんな事よりも、貴方は芝居の出来がどんな工合だつたかとお訊きなるでせう。しかし私は、井上と井上會のために、深くそれをお話したくありません。實は今日これを書くについて、井上會の當事者が書いた演藝畫報と新小説の野外劇場の議論を讀んで、餘りにその考への暢氣で大掴みなのに驚かされました。——そこに「自然と藝術との融合」だとか、「普通の芝居の舞臺の設備は、人工に據つてゐる拵へものだから、見物に切實な感動を與へない」とか、「野外劇は背景にする土地の關係から、是非日本の作物を使はなければならぬから、國粹發揚の一助になる」とかいふやうな、すこし見當の外れた事ばかり考へてあつて、何故に野外で芝居をしなければならぬかといふやうな必要——大事な要求については全く何にも考へてゐ

ないのでした。

□理窟はよして、それよりも久しぶりで關根達發の聲をきいたのが（とにかく眞つ暗なんで顔は見えませんでした。）私 はうれしうございました。先月は新劇社の芝居の Arms and man で久しぶりに横山運平にあひました。往年の高田門下の二秀才にまた巡り合ふやうになつたのを、私の歡びにいたします。——かういふ世の中の綾を見てゐる方が、今の工合ではなまじつかな芝居をみるより餘程面白うござります。

□歌舞伎座の舞踊研究會の「江島生島」といふものは、四五年前に、「歌舞伎」の附録に出てゐましたから、ことに依つたら、貴方はごぞ

んじかも知れませぬ。番組の解説によると、「ひかし大奥の中蔵江島の局、山村座の役者生島新五郎と曲事あり。新五郎は遠島に處せられ、氣の狂ひしを題材となしたる一曲」で、第一段は二人が馴れ染めの夢、その夢がさめて、第二段は、新五郎が氣狂ひになつてゐるところへ、旅商人や、海女が出てきて、これに絡む——といふ筋です。原作でみると、竹本や、常磐津や、長唄のカケ合ひといふことになつてゐますが、今度はそんな手数はかけないで、すべて長唄ばかりで行つてゐました。——節附は小三郎がしたのでございます。

□幕があくと舞臺は眞の暗——やがて「おぼろ／＼と何處にながれゆくやらむ」といふ小三藏か誰れかの聲がきこえると、(小三郎は都

合で出なかつたのでございます。)だん／＼四邊が明るくなつて、江島と新五郎とが乗つた舟が、その暗いなかに浮かぶやうに見えて來ます。それからすつかり四邊が明るくなり切つて、振りになります。だん／＼その振りが悲しくなつて、「夕波たかさ汐さゝるに、さゆるまぼろし潮けむり」といふやうなことで、結局江島が新五郎から遁がれやうとすると、それを新五郎が引きとめる、——途端にまた舞臺が眞つ暗になつて、暗轉といふことになります。——やがて賑やかな舟唄と一しよに、浪の音になつて、舞臺が再びあかるくなると、新五郎が一人、海原の書割の前で苦悶してゐます。おきには「花のお江戸をなア、後にして、雁のたまづさことづけを、諸國の人にたのまれる、旅に馴れたる小商人、草鞋直して急ぎくる、」といふや

うな山臺の唄と一しよに、旅商人が出て來ます。

□これだけ書いたら、この新曲のすべての工合が、たいがいお解りのことと思ひます。——かうなると、所詮私どもは遅れてゐて、囚はれてゐるのかとも思ひますが、しかしどう考へても、かういふ芝居へ、科學的な工夫を取り入れることが、淺墓なやたとへしなくうに思はれます。

□新五郎は米吉、江島は男寅、旅商人は梅雄、——振りは一切、六代目がつけたのださうでございます。

□これは今一寸考へつゐたことですが、一たい時雨といふ人は、あんまり自分の心もちを大切に懸ける結果、なんでも言ひたいことを半分しか言はないで済ましてしまふやうな形ちがありはしないかと

思ひます。要するにこれは、時雨さんの考へがあんまり雲上で、ワルガアなところのないのが邪魔をしてゐるのだと思ひますが、これが爲めに、とき／＼観る方では途方に暮れるやうなことがあります。この間の「丁字みだれ」なんかは、とくにそれが酷かつたものと思ひます。ところでこんだの「江島生島」でも、幸ひに私どもはあの話の筋を知つてゐて、原作も一と通りは讀んでゐたので、曲りなりにもあの芝居の譯が解りました。しかし全くさういふ用意のない見物があれば、すぐ江島と新五郎との生涯や、二人の關係なんかを考へることができたらうかと思はれます。(二、一一)

□歌舞伎座の中幕の「兄弟」は、もとの題は「長子權」といふのださう

です。マアレエといふ作者の名前については、誰れもまだあんまり知つてゐるやうなものがないやうです。貴方はロンドンでご覧になつたのではないかと思ひます。

□登場人物が五人、それも若い女なんか一人も出ないで、地味な、味の細かな芝居だと思ひます、樂隊の騒ぎに馬が驚いて暴れて足を折る事や、今夜豚が子を産むといふ事や、長男が宴會に行つて滅茶滅茶に疲れて歸つてくる事や、父親が外から外套をとりに来て、ストオブの前にある長男につけくといふ事や、そんな事が一々面白く考へられました。仕舞に、トランクの札を書きかへたのが、弟の手蹟なのに氣がついて、一圖にカッとして泥棒呼はりをする、——弟はまた、一圖に泥棒呼はりをされたことに腹を立て、負けずに

遣り返す、——それから二人の心もちがいろく混亂して、そこに悲しい争闘がはじまります、私はふとしたこの小さな悲しい行違ひについて深く考へたいと思ひました。

□長男は左團次、次男は延二郎、父親は荒次郎、母親は左升、それから隣の人が壽美藏です。左團次の長男は、見てゐるときにはさほどにも思ひませんでした、後になつて考へてみると、やつぱり演ることにあるく含蓄のありました。宴會から滅茶く疲れて歸つてきて、宴會の世話がいろく苦勞だつたことを、母親に愚痴のやうに話すあたり、母親がいろく側で世話を焼くのを、うるさいと思ひながらも、なほその好意を考へて、すこしストオブの側へ置いて呉れば、おき恢復するからといふやうな事をいふあたり、父親

に口穢く罵られて、始め反抗はしないで静かに受け答へをするあたり、或る優しい泪ぐましいな心もちがうかゞはれてなんだか或る沈痛な氣がしました。弟が外から這入つてきてから、カッとのぼせて、もう何にも解らなくなつてしまつたやうに、弟に食つてかゝつてからは、割合に延二郎と左升と三人のイキが合つて面白うございました。延二郎の次男は、笹川丹右衛門よりも、一時半兵衛よりも、權太よりも——こんだの芝居の延二郎のどの役よりも巧いものでした。樂隊の騒ぎをきくと、自分も窓のところへ寄つて帽子を振るあたり、トランクの札を書換へることを餘儀なくさせられるあたり——ペンを帽子で拭いて書きはじめるあたりは受けました。あとで兄貴に怒鳴られると、すぐに負けない氣になつて理窟を言ひ初め

る。——母親が宥めにかゝればかゝるほど、いよく昂奮してきて、果ては子供の時分から偏頗に育てられてきた不平や怨みを言ひ立てるところは、かなりその心もちを解ることが出来ました。多分いつもの器用にまかせてやるのだらうと思つてゐましたが、思ひのほか素直にこなれてゐたので、見てゐて氣が好うございました。左升の母親は、取り立てゝいふほどの事はございませんでしたが、しかし流石に急所を掴まへてゐるやうに見えました。長男が宴會に行くのを、はじめにいろ／＼引止めるところ、あとで父親と長男との間をいろ／＼に取りなすところたしかにその役柄を首肯させることが出来たと思ひます。荒次郎の父親は、すこし纏まり兼ねた出来でした。これは去年の錠前屋のときにもさう思つたことですが、この人は感

情の急迫したやうな場合になると、妙に sentimental になります。これは工夫を要すると思ひます。前にいふのを忘れましたが、はじめに窓のところを外の景色を見ながらいろ／＼陽氣の話をするところは、左升と二人で、もうすこし話の心もちを出すことが出来たら好かつたらうと思ひました。(三、二)

□「狂言座」の第一回公演は噂の通り、「浦島」に「曾我兄弟」、それへ開幕劇として、中谷徳太郎君が書いた「夜明前」といふものがついでをりました。はじめの話では、木下君の「南蠻寺門前」や、吉井君の「囊の女」なんか問題になつたのださうでございますが、役者の都合で、お止めになつてしまつたのださうです。

□「夜明前」といふ芝居は、筋書によると「時代を幕末に假り尊王攘夷を稱へる青年の一群によつて、利他主義、博愛主義を唯一のモットオとする教に反抗した思想を宣べようとする。舞臺にとつた場所は京都である。作者の意は、この短い一幕のうちに、翻譯問題や對外問題に對する一種の諷刺をとり入れてあるやうに思はれる」と書いてあります。全く譯はちがひますが、いつぞや自由劇場でやつた秋田君の「第一の曉」と一寸イキの似たものでした。やつぱり黒幕の前へ、若い侍が二三人出てきて、色んなことをいつたり考へたりします。一寸筋書を見ると、大分罪の深いものゝやうに思はれますが、しかしそんな悪くあがいたものではないから、ご安心下さいまし。随分思ひきつて氣のさすやうなことをいつてゐながら、何處

か齒切れがよくつて、悪くこだはつてゐないだけに、いつそ私どもには嬉しい気がいたしました。

□舞臺は「第一の曉」のときの方が好うございました。こんだは舞臺が莫迦に淺くつて、前に頗るいゝ加減な立木が五六本立つてをります。舞臺の淺いのは、後ろに浦島の道具が飾つてあるからだつたさうですが、それは言譯にはなりません。あれでは、淺黄か道具幕の前で芝居をしてゐるやうなものです。立木をたてるのは、大分考への筋がちがひます。どの位邪魔になつたか解りません。星の模様も、もうすこし何うにかならなかつたものかと思ひます。

□役者は伊三郎に紋三郎に樂之助、それに男寅と米吉とでした。伊三郎が一番巧うございました。幕あさに星を仰いでの述懐の獨白なん

か、なか／＼工夫して考へたものでございました。要するに、この人にだけは、この芝居の「洒落」が解つてゐたものと思ひます。伊三郎の次の出来は、まあ樂之助だらうと思ひますが、しかしこれは大分誤譯をやつてゐました。それにとぎ／＼千崎彌五郎の氣分になりかけました。しかし幕切れに、空を見上げて、「まだ夜は明けない」といふところは、不思議に心もちがありました。紋三郎はしばらく措いて、米吉や男寅から「戦ひから戦ひへ」とか「戦ひのために戦ふのだ」といふやうなことを聞くのは大分苦痛なことでした。何んだか罪惡なやうな気がして、なりませんでした。

□「浦島」については、私はなんともいはないことにいたします。坪内博士の新樂劇論といふことを考へ、「浦島」といふものゝ價値を考

へる前に、かういふ種類の芝居を研究することが、狂言座の眞實の
仕事でないといふ事を私は考へますから。——私には狂言座には、
是非やつて貰ひたいと思ふ、もつと大切なことがたくさんあります。
□しかしたつた一と言いはして頂きます。「浦島」をみて、坪内さん
は理想家だと思ひました。幸福な理想家だと思ひました。

□これは嘘のやうな話ですけど、六代目が浦島を踊るといふので、
萬障繰合はして來たお客が大分あつたさうです。

□「曾我兄弟」は森先生がそつくり「夜討曾我狩場曙」を改作した
ものでございます。菊五郎が五郎、榮三郎が十郎と頼朝、紋三郎が
工藤、翫助が大藤内、菊三郎が鬼王と仁田四郎、伊三郎が丹三でこ
ごいます。——市村座の連中が旅へ出て、「狩場曙」を出すといふ

と、いつも役割はこの通りなのださうです。

□この芝居で面白かつたのは、祐經と大藤内との關係、それから續
いて、狩場の假屋へ少將だの、龜鶴だのといふ女が來てゐるといふ
ことの心もちがたいへん色が濃く出てゐたことでございます。少將
は芙蓉、龜鶴は米吉で、二人ともOrieでようございました。殊に
芙蓉がはじめの幕の饗宴のところ、居住ひをくづして坐つてゐ
た姿がまだ眼に残つてをります。討入のところ、兄弟の捨てた松
火の火が燃えついたので、龜鶴と二人で揉み消さうとするところが好
かつたさうですが、生憎私の席からは、兩戸が邪魔になつて見え
ませんでした。

□誰れもみんな臺詞廻しについて一番考へてゐました。歌舞伎を離

れると同時に、いつもの史劇を離れてゐたやうに思はれました。しかし森先生が間にときどき、

伊豆の奥野の狩競に、
家路をいそぐ木下間、

とか、

この敷皮をみるにつけ、
十年の昔ぞしのばるゝ、

とか、

最期をいそぐわがために、
此一枚の敷皮は、
父に見えん彼岸に、

渡す弘誓の舟筏。

とかいふやうな風に、わざと行を替へて書いて置いたところを、紋三郎も六代目も、當り前にいつてしまつたのはすこし失望しました。すこし何んとか工夫がして貰ひたかつたと思ひます。

□筐おくりの幕は、面白い事は面白うございましたが、あすこは或るもうすこし違つた味が出る筈だと思ひます。しかしそれについてはあんまり誰も考へてゐないやうでした。それであの一幕は氣分が平凡に緊縮されてゐるにすぎませんでした。四幕目の頼朝の屋形は、いつもの「狩場曙」の大詰の方が面白うございます。

□明治座の一番目の「増補双つ巴」の繼子いちめから見ましたが、

芙蓉のおたきが譯もなく好うございました。ところがこのおたきについて、大分議論があつて、五郎市を虐待するのは或る手段に爲めだといふことは、手負ひになつて、モドリになつてから（はじめから悪氣があつたのでないとすると、モドリといふ言葉を適用するところが出来ない譯ですが）はじめて見物に解らなければいけないので、芙蓉のやうに「或る手段の爲め」といふことを考へて、見物にもはじめからそれを考へさせるやうに、弱い、悲しい心もちをみせては、間違つてゐるといふのでございます。しかし芙蓉のやうな繊細な心もちを持つた役者に、そんな非難するのは、非難をする方が無理だと思ひます。源之助なら、繼母として憎い繼つ子を折檻する一つの芝居が出来、更に手負ひになつてから、それが手段の爲めだつたと

いふやうな告白をする一つの芝居が何んの心配なく出来るかも知れませんが、芙蓉には、とても白々しくつて、その二つの芝居をべつ／＼にやることは出来ないだらうと思ひます。これは出来ないのが眞實で、これからはだん／＼かういふ事實が出来てくるのだらうと思ひます。

□二番目の「曠小袖往昔八丈」といふのは髪結新三の事です。春だから、梅雨小袖を止して、曠小袖としたのださうです。随分解らない話だと思ひます。

□この芝居は、四十三年か四年に、市村座でやつたばかりでございます。東藏の家主が、すつかり松助で、齒が浮くやうなところがあった事をまだ覚えてをります。今度は東藏は勝奴にまはつて、家主

は吉右衛門がしてゐました。

□菊五郎の新三は、この前よりも、役の心もちに眞實が出来てきたといふのが定評です。たゞ家のところが、家主が滅茶くな爲めに、ちつとも面白くございませんでした。さういつても、吉右衛門の家主は、不思議なほど駄目で、全くこの役の呼吸が解らないやうに見えました。恐らく吉右衛門一生の不作ではないかと思ひました。私はこの人の頭腦の混乱した工合をはじめて見ました。

□家のところより、永代橋の方が面白うございました。たゞ「書き送る」の獨吟が、なんだか舞臺の心もちとしつくりしないで不愉快でした。——前の幕から、この幕についで、雨の降つてくる段取が、なんだかたいへんに今度は氣に入りました。(三、二)

□宮戸座の「戀闇鶉飼 燎」の四幕目「笹子峠古狼小松殺の場」で、幕があくと、辻堂の中から小松が出て、一人の兄に逢ひたいと思ふけれど、勘當をうけてゐる身の上だからといふやうな述懐の臺詞があります。するとそのうち、方々から、狼の吠える聲が遠くに聞えて來ます。小松はぢきにそれを聞きつけます。一寸この三十秒ばかりの間が凄うございました。やがて方々の陰から狼の姿を現はして來ます。小松は悲鳴をあげて、方々逃げますけれど、すつかりもう周圍を取巻かれて、どうすることも出来なくなる。やうやくの事で辻堂の中へ這入ると、狼は横手の羽目を食ひ破つて、小松を外へまた引きずり出してきます。髪は振り亂して、顔は血だらけ

になつてゐます。とう／＼おほかみ 狼おほかみ にそこへ引き据すえられたところで、舞臺たいが廻まはると石和川原いさわがはらで、源之助げんのすけの二役やく甲作かふさくが悴せの乙松おとまつと二人ふたりで、篝火かきを焚たいて鶴つるを使つかつてゐます。水みづの上うへは暗くらいのです。やがて甲作かふさくは鶴つるを上うへへあげると、暗くらい水みづの上うへへ人間にんげんの首くびが流ながれて來きます。氣味きみが悪わるいから、そつちへ流ながしてしまへと甲作かふさくにいはれて、乙松おとまつが遠とほく流ながしますか、しかし幾いくら流ながしても、その首くびは二人ふたりのそばへ寄よつて來きます。甲作かふさくは駄目だめだから自分じぶんが流ながすといつてその首くびをうけとります。乙松おとまつにその首くびはお前まへによく似にてゐるといはれて、ふと篝火かきの火影ひかげで見みると、それは現在げんざいの妹いもうとの首くびだつたのにおどろきます。思おもはずその首くびを抱だいて、その淺あさましいすがたになつたことを嘆なげきます。その間にだんだん篝火かきは消きえて來きます。やがて全またくそれが消きえつくして、四邊あたり全またく

暗くらくなります。「篝火かきが消きえた」と、乙松おとまつが便たよりないやうにいひます。甲作かふさくは、「この顔かほが見みたいか」と乙松おとまつにいひます、おきに雲くもの間まから月つきが出でます。甲作かふさくは月の光ひかりで、もう一度ひとたび妹いもうとの顔かほをながめます。——静しづかな合方あひかたで幕まくになります。

□眞實ほんとにすると、この後あとに甲作かふさくの家うちの場ばが一幕まくありますが、こんだの芝居しばゐではこれが結末けつまつになつてゐました。默阿彌もくあみの氣分きぶんには遠とほくなるかも知れませんが、これだけの結末けつまつの方が悲かなしい芝居しばゐになつてゐて好こいと思おもひました。

□今いまの世よの中で、眞實ほんとに默阿彌もくあみのかういふ種類しゆるいの芝居しばゐをやることの出來でる連中れんちゆうといつたら、この宮戸座みやとざばかりではないかと思おもひます。達磨合羽だるまがっぱや、ラッコの帽子ぼうしや、繪入新聞えいりしんぶんや、三十錢紙幣さんじゅうせんしちへいの氣分きぶんがよ

し解つたにしても、芝鶴や、勘五郎のやうに、いふところの散髪鬘の似合ふ顔がだん／＼なくなつてしまふことは仕方がないと思ひます。かういふ理由からいつて、壽朝の判人や、荒藏の船頭は、藝術品として私どもが尊重する必要があるものだといふ事を考へたいと思ひます。

□源之助は小松よりも甲作の方が好うございました。小松は要するにいつもの源之助だと思ひませんでした。甲作は一と目見てすぐにそのスツキリしたところが氣に入りました。これは以前紀の國屋が宮戸座にゐた時分にも考へたことですが、この人はもう、若い女形としての眞實の命はすでに餘命が幾何もなくなつてゐると思ひます。あの人が眞白に濃く塗つた白粉の顔をみると、私どもには、

綺麗だの、水々しいだのといふ感じより寧ろ或る臺が立つたといふやうな醜惡な心もちが考へられて、或る、悲しい、情けない氣の方がさきに立ちます。幾ら演ることが格に入つてゐても、味があつても、若々しくつても、その悲しい、情けない心もちを救ふことはできません。(三、三)

□帝劇の梅幸の富樫のなつてゐないのに驚きました。最初の名告から全くグラついてゐました。當然梅幸から求めることの出来る筈の、所謂ふつくりした、温雅な心もちを全くそこに求めることが出来ませんでした。温雅どころか、しきりに首で芝居をするのが、譯もなく、富樫を、卑しく、下らなくみせました。問答も辨慶とイキが合は

ず、後の「とまれとこそ」に至つて、遺憾なくすべての破綻の裏書を
しました。歌舞伎の左團次にも、市村の吉右衛門にも遙かに及ばな
いものでした。とにかく高島屋のは落ちついてゐました。さうして、
羽左衛門の辨慶とすべて心もちが融合つてゐたと思ひます。吉右衛
門はまた吉右衛門で典雅にこなしてゐました。さうして問答のあた
りの沈痛な味。——後段の「判官どのでもなき人を——」のあたり
の芝居をしないところが氣に入りました。

□幸四郎の辨慶は、音量の豊かるところと、前に幾度かやつて手か
げんの解つてゐるところとに、羽左衛門よりも、菊五郎よりも大分
徳をしてゐます。ですが、音量は豊かでも、そこに問答の臺詞の抑
揚に大分申し分があります。前に手かげんがあるだけに、ある安心

が附き纏つてゐて、とき／＼量見の浅いままに固つた考へがちら
ちら見えてゐました。私に一番氣に入らなかつたのは、肝心の「つ
ひには泣かぬ辨慶が」から、やがて語りになつて、辨慶の感傷が急
に全く消えてしまつたことです。「流にひかる、曲水の」あたりも、
徒らにある繊細な巧緻ばかりを求めようとしてゐました。羽左衛門
のは、どこよりも語りになつてからがよく、「とかく三年のほどもな
く／＼」で、中啓で義經をさし、左の手を下へついた姿が、いかにも
心もちよくまだ眼のささに残つてゐるやうな氣がします。菊五郎の
は、調子が調子だから、前半は随分苦しいだらうと思ひましたが、
なんでも半分は氣でこなししてしまふだけに、とにかくそこに感興が
横溢してゐて、見た目は誰のよりも面白かつたことを否むことが出

来ません。後半「慌て、事を仕損ずな」から、いかなる天魔鬼神も」
で、富樫と双方から詰め寄るあたりは、四天王がこゝは勘彌と東藏
と伊三郎と榮三郎で顔を揃つてゐますから見立がありました。帝劇
の四天王は、菊四郎に小治郎に宗五郎に幸藏です。この四天王では
とても辨慶の周囲のある心もちを濃くすることが出来ません。

□富樫が引込んでからも、帝劇のは、宗十郎の義経が、歩くのにも
肩を張つてあるいて、全體することが荒つぽく、「判官おん手をと
給ひ」で膝をすゝめるあたりも、全くそのやさしい、悲しい心もち
をうけとることが出来ませんでした。三津五郎のは、思ひのほか氣
高く出来ました。すべて菊五郎のイキを心得てやつてゐたので心も
ちがよく纏つてゐました。

□所謂長唄囃子連中だけは、帝劇が一番立派でした。ですが、その
割りにそれに何の威歴もなかつたのが不思議でした。(三、四)

□歌舞伎座の一番目「花勝見奥譚」といふのは山崎紫紅氏の新作
です。義経が陸奥の國へと下つて、泰衡のところへ身を寄せてから、
泰衡の妹のかつみ姫とお定まりの戀に落ちます。泰衡の兄の國衡は
とかく義経を邪魔にして、何うにか義経を片付けてしまはうといろ
いろ泰衡を焚きつけます。かつみ姫のこともうすく感づいて、そ
れを以ても泰衡に迫りますけれど、泰衡はいろく「義理」を考
てなか／＼承知しません。すると或る日、伊達の一家の追善の佛事
があります。義経もその日寺へ來ることになつてゐると、國衡は一

策を案じて、急にその參詣を見合させるやうな事にします。そんな事は知らないから、急に義經から斷りが來ると、泰衡も忠衡も高衡も通衡もそれについていろ／＼考へます。國衡はそばから散々義經を毒づきます。すると義經の方では國衡の策に乗つて一度斷つた事は斷つたけれど、外の事でない佛の事だからといふので、京の君へ辨慶を附き添はして急に代參といふ事にして寄越します。その知らせをさくとまた國衡は、伊達の家風として、晴れの日には女を忌むといふ事がある。それを承知でゐながら京の君を寄越すのは不法だといつて、更にまた義經を毒づきます。しかし泰衡は穩かに忠衡や高衡を連れて出迎ひに行きます。あとに一人國衡が残つてゐると、そこへ來かゝつたのはかつみ姫です。かつみ姫は義經の顔が見たいば

かりに此處へ來たのですが、急に來なくなつたときいて大分失望してゐます。國衡はそれを見ると、京の君がゐる以上は、お前が幾ら思つたつて無駄な事だ、しかしもし望みが叶へたいなら、いつそ京の君を亡いものにして、お前が北の方になるやうな事を考へたらいいだらうといふやうな事をいつて煽り立てます。おのれの道はあれで歩めといふやうな事をいひます。やがて京の君が堂のなかに這入らうとすると、かつみ姫が小蔭から短刀を閃めかして飛びだします。京の君はおどろいて逃げまはつてゐると、そこへ泰衡が來かゝります。京の君は思はず泰衡に縫りつきます。かつみ姫は逃げます。京の君はふと、泰衡に自分が抱かれてゐるのを氣がつくと、驚いて泰衡から離れようとしします。しかし泰衡はしつかり抱いてゐて離

さない。そこへ辨慶が来てその體裁をみると、すぐその間へ割つて這入つて、泰衡にその不法を詰ります。一度は太刀の柄へ手をかけますけれど、すぐに自分たちの境涯を考へると、辨慶は自分から穩かに事を濟まして、京の君を連れてそのまゝ其處を去ります。すると其處へまた國衡が現はれて、眞實京の君が得たいなら、義經を討てと説きます。泰衡はふと心が動きます。決心をすると同時に、國衡に堂の前の磬を打たせます。それを聞くと兩花道から六七十人の人數が集まつて來ます。そこで陸奥は陸奥人が統治しなければならぬと泰衡が戦ひを宣します。その翌朝、泰衡と國衡はまづ、身を挺してその戦ひに反對した忠衡へ討手を向けます。義經の方では、それをきくと事いよくこゝに到つたと考へて、「最後」の時の用意

をしてゐると、かつみ姫の腰元が山伏の姿になつて、かつみ姫の使命を齎してきます。それは船手の關所にかつみ姫の遊山船がつないであるから、それに乗つて此處を落ちろといふのです。しかしもうそのときは、國衡の指圖で船といふ船はみんな河原へ引上げさしてしまつたあとです。かつみ姫はなぜ自分の船を勝手にしたといつて、國衡に食つてかゝります。泰衡がそばから假にも自分たちのやる事に同心しないやうなら、兄弟として用捨はしない、忠衡同様成敗すると脅迫します。するとかつみ姫は、鎌倉殿は高館様を討たせる、三郎様は兄上たちに討たれる、明日は誰が身の上ぢややうなといふやうな事をいひます。それをきくと、泰衡はふと或る痛ましい悲しい氣になります。國衡は京の君の事を思ひだして、すぐにかつみ姫の輿を

持たして京の君を奪ひにやります。しかしそれが義經の館へ着いた
ときにはもう、辨慶も龜井六郎もすでにみんな果敢ない最期をし、
義經も京の君も龜鶴丸も自害をいたしました後で、館のなかにはも
う一面火が廻つてゐます。京の君を連れに來た國衛の家來は、火の
中へ飛び込んで義經の首級を持つて來ます。かつみ姫はその家來を
殺して、その手から戀しい義經の首級を奪ひます。さうしてその首級
を抱いて、猛火の中へ躍り込む——と筋書には書いてありますけれ
ど、實は、骸は何うとかして京の君と一しよでも、自分は首と一し
よに何うだといふやうな獨りごとをいひながら、愚圖々々に其處に
倒れてしまつて幕になります。以上、三幕五場。

□序幕の毛越寺内大泉池の場は遅れて見損ひました。二幕目中尊寺

金色堂の場は、作者が一番氣を入れて書いた幕のやうに思はれまし
たが、すこしだら／＼してゐて、とき／＼退屈しました。これは餘り
に段取をつけることにはかり細心で、前後の纏まりをつける事を忘
れたやうなところがあつたからではなかつたかと思ひます。國衛の
魂膽がそれからそれへと動いて行く筋道は鮮かに解りましたが、一
一役者をよくする爲めと思はれるやうな顛末が幅をして、それが一
幕の印象を大分弱くしてゐたやうに思はれました。辨慶が泰衡をき
びしく責めかけて、途中でその心もちを替へるやうにするところは、
ふと義經主従の痛ましい颯零の境涯が考へられました。幕切に磬を
打つて舞臺に一杯人數を集めたのはとにかく面白うございました。
しかし三幕目の高館義經座所の場は急に龜井六郎の兄と稱する男が

飛び出してきたり、更にかつみ姫の腰元がその男に化て來たりして、あんまり主要でない人物ばかりが働いて一幕を潰してゐます、割合に今まで一貫してきたこの芝居の心もちが、この幕で大分蹂躪されます。廻つて北上川船手關所の場、泰衡がかつみ姫の述懐をきいて、思はず深く人間の悲しみに思ひ入るのは氣に入りました。しかし何ういふ譯か、見てゐてその悲しみが強く響くところはありませんでした。しかしこの邊のイキは、去年の秋本郷座でやつた同じ作者の「明智光秀」の三幕目にたいへん似てゐるのに氣がつかしました。また廻つてもとの義經の館になります。辨慶が半分死んだやうになつて歸つてきて、龜鶴丸と別れを惜しむのは何か出所があるのださうですが、しかしこの芝居では、こゝでこんなに辨慶を動かすのは、すこ

し筋合が違ひはしないかと思はれます。前半と後半との釣合がとれません。後半京の君を連れに來た國衡の家來が、火の中から義經の首を持つてくると、かつみ姫がそれを刺し殺すのは、いよく「明智光秀」で、かつみ姫はそつくり玉井です。

□八百藏の泰衡、左團次の國衡、歌右衛門のかつみ姫、門之助の腰元、それに羽左衛門の義經、秀調の京の君、段四郎の辨慶——このうちで出來はやつぱり左團次でした、とにかくかうなると、一番筋目の立つた、素性のたゞしい藝を見せる事を、誰も否むことが出來ないだらうと思ひました。八百藏の泰衡はどう見ても勝手がちがひます。全體、役の上に「感情」を盛ることが出來ないのですから仕方があります。歌右衛門のかつみ姫も同断です。門之助の腰元は、

全體この人を煩はすほどの役ではありません、一番ご難だつたのは段四郎の辨慶でした。三幕目に揚幕から聲をかけて出てくるところから、龜鶴丸との別れ、花道の附際から雑兵を追ひ散らしながら這入るまで、大分自分では味噌があるらしいやうですが、大時代で、この芝居へ出てくる辨慶とはとてもうけ取れませんでした。

□二番目の新皿屋敷は辨天堂からです。典藏は歌十郎、紋三郎は八百藏です。八百さんは今度は一番目で白く塗つて、二番目でまた白く塗るのです。歌十郎の典藏は思つたより駄目でした。

□奥庭古井戸の場はみませんでした。仁左衛門の主計之助といふものは一寸見たい気がしましたけれど、なんだか気が乗らないから止

しました。しかしかういふ芝居の「殘虐」については一度ゆつくり考へてみたいと思つてをります。

□宗五郎の家、宗五郎は羽左衛門です。花道からぼんやり思案しながら歸つてくると、途中で町内の若い衆と擦れちがひます。この若い衆が去年の秋の市村座のときには、祭絆纏を着てゐましたが、今度は當り前の着物を着てゐます。これが當り前なのだそうです。しかし祭絆纏を着せた方が細心で面白いと思ひます。

□一たいの段取が、市村座の六代目のことにすると、たいへんにはさらくしてゐました。しかし側で親父やおはまがやさもさするのを、ちつと黙つて、おつたは不義をしたにちがひないと考へてゐる間が何となく身に沁みて見えました。しかし卯三郎の親父と門之助の女

房とが悪いので、あとになつても大分宗五郎が損をしてゐました。全體卯三郎に親父をさせるといふのが解らない話で、嘘にもあの親父の言葉に訛があつては仕様がありません。それにあんな岩壘な身體では、何より大切な同情を惹くことができません。新十郎のときにもその難がありました。書き卸しのときの壽美藏はあれで盲目だつたと聞きました。その位でなくつてはいけない筈だと思ひます。かうなると蟹十郎といふ人が戀ひしくなります。

□酒亂になつてからも、六代目のやうに賑やかではありませんでした。それだけ脱線するやうな虞れもありませんでした。——何處までも、或る「眞實」が一幕續いてゐたことが認められました。(三、六)

宮戸座と眞砂座

何日だつたか——たしか八月二十日頃だつた。なんでも空のよく晴れた暑い晩だつた。夕方飯をすましてから、友達と二人で家を出て、公園をぶらぶらあるいてゐるうちに、宮戸座の前を通ると、丁度燈火のつき際に、たいへん景氣がよかつたから一と幕這入つて見た。丁度新派の「友」の芝居の幾幕目か、あいたところで、木下のお君といふ女が青森で自分の亭主を殺して來た事を、柴田の山田誠一といふ男に告白して、涙ながらに猛一といふ子供の養育を頼むと

ころだつた、久しぶりの芝居の所爲だらう、非常な入りで、何處も
かも一杯に、ぎつしり詰まつた。しかし何んだかだらく長い幕
で、ちつとも見てゐて面白くない。周囲ががやく／＼してゐるので、
臺辭は聞えないし、後ろから押されて暑くつて仕様がなから、幕
になるのを待ち兼ねて、一と幕で外へ出てしまつた。——出てしま
つて私はほつとした。

それからまたぶら／＼歩いて、麻橋まで來ると、まだ時間が早い。
今から家に歸つたつて仕様がなからといふので、更に電車に乗つて
濱町まで行つた、暗い、涼しい河岸を新大橋の方へあるいて、元の
大橋の方からぶら／＼中洲へ出た。ふと眞砂座の前へ行つて見ると、
「木やり唄」といふ芝居をやつてゐた。私は四五年前、駒形の芝居で、

後藤良介がこの芝居をやつたのを見た事がある。仕事師と藝者の芝
居だ。その二幕目だか三幕目だかに、仕事師が酒の座敷で辯護士か
なんかに盃をぶつけられて怪我をするところがある。しかしその
時仕事師は何にも荒立てずに、側にゐた弟分なんかを無理に宥
めて、座敷を出るところの舞臺の心持が、なんでも莫迦に氣に入つ
て、その幕だけ二三度見に行つた事を覚えてゐる。何だか懐かしく
なつたので、早速また一と幕這入つて見た。

這入ると丁度、女主人公の藝者の家の幕があく所だつた。その女
主人公は義理の爲めに主人公の仕事師と縁を切つて、一人で果敢な
い日を送つてゐる、主人公はそれを義理の爲めにしたと知らないで、
一圖に女が心變りをしたものと思ひこみ、手紙で呼び出しをかけて、

その恨を返さうとする、すると偶然その仕事師の女房とその藝者と
が逢ふと、二人は久しい以前別れた姉妹だと解る幕だつた。私は何
んだか古い夢を見せられたやうな氣になつた。次は大詰で、水道を
利用する大道具を見せるといふので、後からくとどんくと這入つ
て来る。無理に詰められるので暑くつて仕様がなかつたが、しかし
私は我慢してもう一と幕見る事にした。さうして主人公の仕事師が
遺恨のある悪い辯護士を殺す「結末」まで見て外に出た。外に出た
らもう十時半過ぎてゐた。

前置が長くなつた。しかし要するに、一とばんのうちに、思ひが
けなく東京の隅の古い芝居を二軒みたことが私はうれしかつた。
さうしたら今月になつて、七日の朝、突然演藝畫報から端書が來

て、「宮戸座と眞砂座」の劇評を書けといつて來た。丁度雨がしとし
と降る、薄暗い、いやな日だつた、その端書を見たら、不圖なんだ
か急に、今日行つて見て、何んか書いて見たいやうな氣になつた、
眞砂座へは随分暫らく行かなかつたが、三月ばかり前、勘彌が團七
茂兵衛の芝居をやつたとき、舞臺へ鶴屋南北といふ人間が出るのが
見たくつて、それがために五六年振りで行つた。併し宮戸座へは何
んにも機會がなくなつて、やつぱりもう五六年行かない。どうせ遊ん
でゐるのだから、久しぶりで一日ゆつくり眞面目に序幕から大詰ま
で見てみようかと考へた。それから畫報社へ書くと返事を出して、序
に〇の所へ電話をかけて誘ふ。——さうしてその日にすぐ二人で出
かける事にした。

午後になつてもまだ降つてた。三時アキだといふから、そのつもりで家を出て、公園を抜けると、雲が低いのと四邊がびしょ／＼してゐるのとで、そこはもう夕方のやうに昏かつた。中屋や勅使河原の軒の電燈が、晝間でも灯いてるので、餘計それが夕方らしい——もう秋の夕方らしい氣がした。

「友」といふ新派の芝居に「女團七」——本當なら今日は七日で奇數の日だから「四谷怪談」なんだけれど、前に三十一日と一日と、二日奇數の日が續いたので、すつから順が狂つてしまつたのだ。かくて、私は〇と二人、東の高の五で一日暮らした。

「友」といふ芝居は夏目先生の「彼岸すぎまで」と一緒位に、東京朝日に出てゐた、てい女といふ人の作を脚色したものだ。私はそ

の新聞に出てゐた時、讀まなかつたから、原作はどんなものだから全く知らない。併し芝居になつた處で見ると、何んだか英國あたりの通俗小説にでもありさうなものだ。筋を書いていると長くなりさうだが、要するに大村猛といふ法科の學生が、お君といふ下宿屋の女中と戀に落ちたのが初まりで、その猛が或る過失からそのお君の親を殺す。併し猛はその時もう大學を出て、獨逸へ留學する間際だつたので、一緒に大學を出た山田誠一といふ男に後を任かして、その儘獨逸へ立つてしまふ。するとその後で誠一はお君の親を殺した嫌疑がかゝつて牢へ入れられてしまふ。お君は思ひがけなく猛の「秘密」を知つてゐる舟大工と「秘密」のために據るなく夫婦になつてしまふ。五年の月日がたつ。猛は獨逸から歸つて來て、博士になり、前

から許嫁だつた女と結婚する、誠一は牢から出て来て、憂世の外にかくれて、社會のために慈善事業を初める。お君はその後、猛の子供を産んだが、どうも一緒になつた舟大工と折合が悪い。男は面白くないから、自暴を起こしてしまつてとかく昔の「秘密」をいひ立てる。お君はそれを怖れて、その「秘密」の爲めにその男を殺してしまふ。殺すと、すぐお君はその猛の子を連れて東京に來、偶然誠一に會ふ。それから誠一に子供の事をたのんで、汽車に轢かれて自殺してしまふ。猛はやがて誠一にめぐり合つて、其後のすべての事を聞き、良心の苛責に堪へられなくなつて、これも短銃で自殺してしまふ、といふ芝居だ。何處か「無花果」や「新生涯」なんかに似た所があるが、併しなんだか色の薄い、つまらない芝居だ。

低級な作者の書いた小説を低級な脚色者が脚色した芝居。——併し脚色の仕方をもう少し考へたら、もう少しはどうかになつた芝居になつたかも知れない。この種の芝居の脚本として、この脚色の仕方は拙劣だ。冗長でだら／＼と無駄が多く、さうして一貫した心持が出てゐない。どの幕も、どの幕も、たゞ單なる「叙述」をやつて筋を運んでゐるばかりで、殆んど「描寫」といふ事で行つてゐない。僅かに、「お君の家」と、「青森の源藏の家」と、「友の家」のある部分だけに「描寫」があるが、併しその「描寫」が、粗漫な、淺墓なものだ。だからどの幕にも氣分がない。

併し單に叙述してゐるその筋の運び方でも、非常に不用意で、輕卒で、徒らに多くの事柄を話さうとして、反つていふべき事や、い

はなければならぬ事を全く忘れてゐる。時々筋書を見なければ、人物の關係や、事柄の經過なんか解らなくなつてしまふ。例へば佐藤保（五味の役、併の私の見た時は、芳三郎が病氣の爲めに、猛を五味がやり、この役は吉岡がやつてゐた）といふ人物が、この芝居では主要な人物の一人にしてゐる。さうしてこの人物の周囲の事まで詳しく話してゐる。併してこの芝居の組立、——この芝居の脚色者がした筋の運び方では、この人物はそんな主要な人物になつてゐない。——ならなくなつてもいゝやうになつてゐる。是非あの人物を出さなければならぬといふやうな必要を認める事が出来な。しかし尙、それを主要な人物の一人として、その周囲の人物や、事柄を皆一様に濃い色で塗つてしまつたものだから、無駄ばかり多く

つて、心持が徒らに錯雜になつてしまつた。

萬年町の裏長屋の幕へ秀調の娘と、壽朝の老人と高麗三郎の遊人とが出る。筋書で見ると、娘はもと佐藤の家へ奉公してゐたものとしてゐる。併し筋の運び方から見ると、何んの爲めにあの芝居にある場面を見せたのか解らない、秀調と壽朝と高麗三郎との爲めに、あゝ書いたのかも知れないが、それならば餘りに智恵のない書き方だ。原作では何うなつてゐるのだから知らないが、この芝居ではあの娘が佐藤の家に奉公してゐようが、おまいが、そんな事はなんにも直接關係がないのだから、單にあゝいふ境遇に置かれた娘と老人として、もつと薄い色で塗つて置かなければならぬものだ。さうでなくつても、若し誠一が貧民を救助したり悪人を感化したりする様を

見せるならば、もつと何んとか外に、巧い仕方があるだらうと思ふ。要するにあの幕と、次の弄月亭の幕とは無駄な幕だ。無駄なばかりでない邪魔な幕だ。

併しお蔭で「脚色」といふ事を色々考へた。まだ外にも色々な事を考へたが、こんな事を一々書くのは莫迦くしくなつたから、いい加減にして先へすすむ。

この芝居の原作は、要するに、淺墓な理想を書いた小説で、出て来る人物は皆作者の理想の人間なのだから、それに向つて私のやうにとやかういふのは、全然筋が違つてるかも知れない。併しさういつても柴田の役の山田誠一といふ男は妙な男だ。一體どういふ境遇にある男だか、それに就ては全く筋書にも説明してないから解ら

ないが、友達の人殺しの罪を引受けて牢へ這入る。さうしてどういふ裁判があつて、どういふ所刑をうけたのか知らないが、五年後には牢から出てゐて、立派に慈善事業をやつてゐる。併しこの男が牢へ這入つた時、この男の周圍の人々は黙つて見てゐたのだらうか、牢へ這入つてからも構ひつけなかつたのであらうか。とにかくこの男が牢から出たのを、保なんかと死んだものと思つてゐたのは可笑しい。また誠一が自分で世の中に所在を知らさずにあるといふのも無理だ。それからこの男のいふ所を聞くと、自分の資産でもつて事業をやつてゐるといふが、初めになんともそんな資産のあるやうな事を知らしてないのは不用意だ。初めの幕の柴田の様子では、とてもそんな資産のあるやうな風には見えなかつた。それからまた柴田は

法科の學生とか、法學士とかには全く見えなかつた。序幕に宿屋の浴衣の下へ手首で止める袖の長い白いシャツを着てゐたが、今の若い學生や若い學士は、決してあんな服装はしやあしない。それからまたあんなに單純で遲鈍でありやあしない。

其處へ行くと、五味は流石に柴田より解つてゐた。柴田には車夫と馬丁の肚はわかつて、學生の肚はわからない。五味は獨逸から歸つて來ても、其れらしかつた。婚禮の場でも園遊會の場でも顔がやゝ蒼白く愁を帯びて見えるのがよかつた。しかし園遊會の幕切に、誠一が自殺したこの猛を後から支へながら「名譽は永久に光つてゐるぞ」と一言いふが、あの一言が莫迦に可笑しく響いた。考へたら、なぜあの芝居であの場合あんな事をいふのだから解らなくなつた。

この芝居の中で、皆木偶のやうな人間ばかりの中に交つて、源藏だけが生きた人間だ。一人の女に惚れる。惚れるとその女にはもう男がある、すると圖らずもその男と女の秘密を知つた。併し尙女が思ひ切れない。それから惚れた一筋の心で、方便のためにその秘密をいひ出して口説くと女が承知する。だから喜んで一緒にゐる、一緒にゐるうちに就ても、今までの土地にゐては、女の爲めに悪からうと思つて北海道の方へ移住する。併し女はどうしても自分に對して情愛がない。冷淡だ。それに義理の仲の子供は懐かない。そこで色々な事を考へる。考へてくその悶を遣るために飲めもしない酒を無理に飲む。飲んで女に當る。——要するに源藏は凡人だ。悲しき凡人だ。悪い奴ではない。お君や山田が考へるやうな悪い人間ぢ

やない。寧ろ善良な人間だ。中野は決して悪い奴にならずに、この凡人の性格をとにかく明かに描いてゐた。

これは餘計な事だが、「青森港源藏宅」の場で、この源藏が有明節が合方で、下手から道具箱を擔いで酔つぱらつて出て來るときの舞臺の心持から私はふと或るものを見出して、非常にセンチメンタルな氣持になつた。

木下のお君が序幕で、殺された父親の屍體に取りすがりながら、母親の幻影を見て騒ぐ、——あれが非常に私には不思議に思へた。しかし今これを書きながら、波止場の所でトロツクの軌道につまづく工合と、刑事に突き當られて驚いてその顔を見、刑事なのに更に驚いて下手へ逃げ込んだ工合とをふと思ひ出した。猛一をやつたいさ

みといふ子役は子柄がいゝ。併しこの猛一が友の家でうたふ鳩の唱歌は出鱈目だ。あんな些細な事で藝術的氣分を甚だしく阻害される事がある。私は初めに人の出入や、舞臺技巧でこんな氣になつた事ばかりを、側から書き立てやうと思つたが餘り長く書きすぎたので書く事が出来なくなつた。

二番目の「女闘七」——この脚本の價値の嚴密な批判はしばらく措き、私はこの脚本の組立が、初めの幕から終りの幕まですべて祭りの日の出來事になつてるのが好きだ。どの幕にもどの幕にも、賑やかな祭の心持を出す合方が使つてあり、さうして返しの幕と幕との間を尙賑やかな祭の囃子でつなぐのも、當り前の事だが私達には興味がある。

秀調のお梶は科の角々源之助を見出す事に依つて、一種の藝術的興味を覚えるのだ。併し秀調は源之助より年齢が若い。さうして源之助より艶やかさが若い。義平次婆にさいなまれて、全く弱くなつて盡す工合が女らしかつた。義平次婆は勘五郎だ。これは好い事は解つてゐる。私はこの人の舞臺のエゴイステイクな所が、時々癪に障るけれど、この義平次婆はやつぱり巧妙だつた。とにかく此間見た芝居の中で一番よく覚えてゐるのはやつぱり濱町河岸のこの泥仕合の幕だつた。

私は、この二番目の舞臺から、特に二人の役者を發見した。一人は荒藏といふ役者、一人は種丸といふ役者だ。私はこの荒藏の顔を、もう何年この宮戸座の舞臺の上に見てゐるか知れない。さうして

私はこの種丸の顔を、淺草座の子供芝居の舞臺で、吉右衛門や宗之助なんかの間に、長い間見てゐたのだ。

私には其處に果敢ない私の「思出」がある。——荒藏は番頭の傳介をやつてゐた。さうして種丸はお梶に手を捻られて出て來る仲間をやつてゐた。

芝居を出て家に歸るとき、まだ雨が降つてゐた。

宮戸座に行つた翌る日、私は續けて眞砂座へ見に行つた。やつぱり今日も雨がびしよびしよ降つてゐた。

「羽衣草」といふ芝居、私は前の日かに新聞で鈴木春浦氏の劇評を讀んで、たいがい當りがついたので、實は餘り氣が進まなかつたの

だ。舞臺が箱根の山の中で、伯爵が出て、令嬢が出て、花賣の娘が出てと聞いたゞけで、いゝ加減心持が悪くなつてしまつた。

遺産相續——横戀慕——奸計——誘拐——監禁——殺人——これ

だけ並べたら、誰もすぐに書生芝居の古い夢を考へるだらう。併し私はこの芝居を見て、決して古い夢を見せられなかつた。——見る事が出来なかつた。

書生芝居には「稚氣」があつた。正直な「稚氣」があつた。併し

この芝居には稚氣の代りに、邪氣がある。不正直な邪氣がある。書生芝居に出て来る伯爵は、たいがい單に善いか悪いかの伯爵だつたけれど、この芝居の伯爵は高遠な理想を持つてゐて、貴族主義を呪つてゐる伯爵だ。虚偽に満ちたうき世を捨て、自然に接するため植物

採集をやつてゐる。さうして自然で偽りのない花賣の娘が氣に入つて可愛がる——といふやうな、書生芝居では考へなかつたやうな理窟がこの芝居の中に一貫してゐる。それで結局、貴族主義の固まりだつた老貴族が、花賣の娘の心に感じて、貴族主義が平等主義に負けるといふ淺墓な理窟が捏ねてある。こんな理窟が邪魔をして、私は書生芝居の古い夢を見る事が出来なかつたのだ。——理窟の裏うちをした芝居に確なものはない。

要するに、「木やり唄」は面白かつたが、「羽衣草」は詰らなかつたといふ事に私は話を歸着させるのだ。仕事師と藝者が出る「木やり唄」には「藝術」があつたが、伯爵と花賣の出る「羽衣草」には「藝術」がない。

芝居といふ方から考へても、役者はみんな、仕事師や、車夫や、刑事や、藝者をやらせると、そこに放たれたやうに生き生きとその役々を演出するが、華族や、學者や、軍人やさうして、令嬢をやらせると、全く囚はれて、緊縮して、所謂腕を振ふ事が出来ない。

餘り長く書きすぎたからいゝ加減して止める。最後に私は久保田清といふ若い女形の、至純な、素直な役者なのに感心した事を一言いつて置く。私はあの役者を國華座で初めて見たが、それからもう随分古い事になる。長い間小さな芝居にばかりゐたにしては、少しもまだ悪い所がない。あの儘に腐らしてしまはなければ腐らない役者だと思ふ。何處か面ざしが死んだ小中村に似てゐる。さうして小中村よりも、もつと淋しい所があるやうな氣がする。(四五、九)

駒形より終

大正五年拾月十五日印刷
大正五年拾月十五日發行

【定價七拾五錢】

■著者印

著者

久保田萬太郎

發行者

富岡直方

■駒形より

印刷者

中田福三郎

■不許複製

印刷所

秀英舎第一工場

發行所

東京市神田區錦町三丁目六番地
振替東京局三八七六六番
電話本局三八七六六番

平和出版社

鏡花

生先

著

■小村雪岱装幀

□定價九拾五錢
□送料八錢

泉好評再版

星の歌舞伎

表紙函張
木版手摺
極彩色
數十度刷
數半截版
菊百餘頁

都會情緒を描ける傑作中の一大傑作なり

●中央新聞評 電車の中で田舎者の老婆の爲め緑なす黒髪水の滴るやうな丸鬚の根元を掴まれた艶麗の清川夫人照樹と其の前にスツクと立つた畫工前原辰匡と此の二人の戀を骨子とした鏡花一流の清艶極な作である書出しから筆には一種牙を東に見せて不思議な構想、變つた波瀾事件の進捗は殆んど意想外に出る舞臺を東京に取つた新しい味もあるし兩國を背景にし絶えず種々なる道具を使ひ夫れ面白く練り合せて居る處矢張り此の人ならでず見られぬ舞伎である其の装幀極めて美しく小村雪岱氏の浮世繪風の木版畫を其儘の歌舞伎を金字に「さやう花」の四字を赤で打つた手際張には前畫紫陽花を寄せたなど心憎い程美しいので數多鏡花宗の人々をして狂喜渴仰せしむるであらう。

發行所

東京市神田區錦町三の六
振替口座東京八七八七番

平和出版社

吉井勇新著 ● 鮎崎英朋畫 ● 小村雪岱裝 定價壹圓

最新刊

西鶴五人女

羽千五頁 刷度十餘 料八送

艷麗な英朋筆の五人女と雪岱畫の装幀を讀者をして惑はせしむ

西鶴の好色五人
人は真に戀に生
き戀に死ぬる歡
樂國の女なり!!!
近作 お夏清十郎
お七吉三は最
も凄艶の文字にて粧たり

● 樽やおせん ● おさん茂右衛門
● おまん源五兵衛 ● お夏清十郎
● お七吉三は先生の最も特意として書かれたる近來會心の傑作なり。

發行所

東京神田錦町三の六
振替東京八七八七番

平和出版社

現代浮世
繪の大家

鮎崎英朋先生著

泉鏡花新作小唄入
柳川春葉先生序

正價壹圓五拾錢
送料八錢

三版

英朋畫集

うた次女

菊判和紙
和綴箱入
挿繪二百五
拾表紙口
繪箱張極
彩木版畫

先生七年間の製作中より品よき中に婀娜たる趣ある藝者風俗や江戸の情を髣髴せしむる恋心の勝れたるもの一度巻を開けば恍惚見惚る幾度見飽きぬ美しい小唄端唄繪本なり

内容	● あな姿	● 芝居の幕あき
	● 梅	● 園菊十六姿
	● 櫻	● 情状情量
	● 柳ぶり	● 戀
	● 道行十二段	● 寫生帳より

▲ 柳川春葉先生序文に……
うた、寐の枕に過る夜、情緒を味ひたまはむ時、露路の細道駒下駄の胸に轟く事もあらばこのうた姿の夢にかよふ、空谷の聲音とも聞きたまへかし。……と。

發賣元

東京神田錦町三の六
振替東京八七八七

平和出版社

大隈侯爵下序

○伯爵

酒井忠興下著

定價圓貳拾錢
送料八錢

四季家庭園藝

四六版
總布製
天金箱入
三百餘頁

家庭は是非備へて居る

園藝書どなたでも容易く出来る
寸地應用自在の園藝名著

○十二月月花歴附圖發行
事早見方

○地方別種時季節表

○いろは引栽培自在

特獨の三六附録

○附録の書き方○苗の育て方

○發兌

東京神田錦町三の六
振替東京八七七七

平和出版社

一坪の土地が一鉢の場所へ
はあれ年中絶えさ花が見れららい
果實が穫れららい其上お總菜をに事
かい。

版三

はやり唄と小唄

○文學士 佐々醒雪序 ○藤澤衛彦著

四六版總クローヌ美本紙數四百七十頁
定價八拾錢——送料八錢——

流行唄と小唄の粹を集めた
るもの興味ある民謠全集

○文學士 沼波瓊音著

○菊半紙版 定價五拾錢 送料 四錢

版四

俳句と其作り方

俳句界唯一の好入門
俳句の作り方を容易に説明す
而も親切周到に解説せる良書

○文學士 沼波瓊音著

○袖珍函入美本 定價六拾錢 送料 六錢

新刊

乳のぬくみ

著者一代の思ひ出の記
好評如溢一般青年子女間に
讀まれつゝあり

發兌 東京 錦町 三の六 振替 東京 八七七七 平和出版社

宛町人 林 勝輔新著

三五判ポケット入総皮製装幀美天
金特製金文字入定價貳圓送料八錢

新刊 **さつと相場の駈引**

著者の豊富な學識と貴重な、經驗で
出來た名著、本書は世間に流布する
無責任書と違ふ
圖僅少資本應用

アマリアオ 佐々木十九著

四六版總布製意匠新案函入
定價八拾錢 送料八錢

新刊 **商賣繁昌の秘訣無駄を省法**

月々の經費がどうして多い乎儲けが
ありながら錢不足をする店は必ず知
らざる所に無駄がある本書は無駄の
秘訣實例を擧げ研究せる快著

森村男爵序

青年會 山本邦之助著

三五版總布製
價八拾錢送料八錢

新刊 **世間で求むる理想的店員**

本書は店主店員の
大革命書也

發兌

東京 田六

和平出版社

八卷 七卷 八卷

7.1
595

8.5. €

終